

確率解析レポート

基礎工学研究科システム創成専攻修士 1 年

学籍番号 29C17095

百合川尚学

2017 年 7 月 28 日

1 レポート課題その 1

講義資料定義 3.1 に定義される Brown 運動が存在する確率空間 (Ω, \mathcal{F}, P) を基礎に考える.

定理 3.8 の Brown 運動の性質 (1), (2), (3) を示せ.

(定理 3.8). $B = (B_t)$ を原点から出発する N -次元 Brown 運動とすると、いかが成り立つ.

- (1) (回転不変性) 任意の $R \in O(N)$ に対して $RB = (RB_t)$ は原点から出発する Brown 運動である. ただし, $O(N)$ は N 次直交行列全体で Rx はベクトル x に左から行列 R をかけることを意味する.
- (2) (スケール則) 任意の $c > 0$ に対して $((1/\sqrt{c})B_{ct})$ は原点から出発する Brown 運動である.
- (3) 任意の $h > 0$ に対して $(B_{t+h} - B_h)$ は原点から出発する Brown 運動である.

証明.

- (1) 講義資料定義 3.1 の番号 (i)(ii)(iii) の順番に照合していくが、その前に $RB = (RB_t)$ が確率空間 (Ω, \mathcal{F}, P) 上の確率過程となっていることを確認する. 任意の N 次直交行列 R は $\mathbb{R}^N \rightarrow \mathbb{R}^N$ の連続な全単射線型作用素であるから可測 $\mathcal{B}(\mathbb{R}^N)/\mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ である. 従って任意の $t \geq 0$ に対して RB_t は可測 $\mathcal{F}/\mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ となるから $RB = (RB_t)$ は確率過程である. 講義資料定義 3.1 の (i) について、連続写像の合成である

$$[0, \infty) \ni t \mapsto RB_t(\omega) \in \mathbb{R}^N, \quad (\forall \omega \in \Omega)$$

もまた連続写像であるから、(i) は満たされている. 次に (ii) を示す. まずは任意の $t \leq 0$ に対して

$$\{(RB_t)^{-1}(E) \mid E \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)\} = \{B_t^{-1}(E) \mid E \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)\} \quad (1)$$

が成り立つことを示す. これは次の理由による. 任意の N 次直交行列 R は $\mathbb{R}^N \rightarrow \mathbb{R}^N$ の連続写像であるから任意の Borel 集合 $E \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ を \mathbb{R}^N の Borel 集合に引き戻す. また R の逆写像 R^{-1} もまた $O(N)$ の元であるから、任意の Borel 集合の R による像、即ち R^{-1} によって引き戻した集合は \mathbb{R}^N の Borel 集合となる. 従って任意の Borel 集合 $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ に対して

$$\begin{aligned} (RB_t)^{-1}(A) &= B_t^{-1}(R^{-1}A) \in \{B_t^{-1}(E) \mid E \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)\}, \\ B_t^{-1}(A) &= B_t^{-1}(R^{-1}RA) \in \{(RB_t)^{-1}(E) \mid E \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)\} \end{aligned}$$

が示され、式 (1) が成り立つと判る. 従って

$$\sigma(B_u : u \leq s) = \bigvee_{u \leq s} \{B_u^{-1}(E) \mid E \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)\} = \bigvee_{u \leq s} \{(RB_u)^{-1}(E) \mid E \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)\} = \sigma(RB_u : u \leq s)$$

が任意の $s \geq 0$ で成り立つ. 任意の $0 \leq s < t$ に対して $B_t - B_s$ は $\mathcal{F}_s^B = \sigma(B_u : u \leq s)$ と独

立であるから、任意の $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ と $F \in \sigma(RB_u : u \leq s) = \sigma(B_u : u \leq s)$ に対して

$$\begin{aligned} P(\{RB_t - RB_s \in A\} \cap F) &= P(\{R(B_t - B_s) \in A\} \cap F) \\ &= P(\{B_t - B_s \in R^{-1}A\} \cap F) \\ &= P(B_t - B_s \in R^{-1}A) P(F) \\ &= P(R(B_t - B_s) \in A) P(F) = P(RB_t - RB_s \in A) P(F) \end{aligned}$$

が成り立つ。これは任意の $0 \leq s < t$ に対して $RB_t - RB_s$ と $\sigma(RB_u : u \leq s)$ とが独立であることを表しているから、(ii) も示されたことになる。(iii) について、行列式 $\det(R)$ が ± 1 になることに注意すれば、任意の $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ に対して

$$\begin{aligned} P(RB_t - RB_s \in A) &= P(B_t - B_s \in R^{-1}A) \\ &= (2\pi(t-s))^{-\frac{N}{2}} \int_{R^{-1}A} \exp\left(-\frac{|x|^2}{2(t-s)}\right) dx \\ &= (2\pi(t-s))^{-\frac{N}{2}} \int_A \exp\left(-\frac{|y|^2}{2(t-s)}\right) dy \quad (y = Rx \text{ として変数変換}) \end{aligned}$$

が成り立つことにより、任意の $0 \leq s < t$ に対して $RB_t - RB_s$ もまた平均ベクトル 0 、共分散行列 $(t-s)I_N$ の N 次元 Gauss 型確率変数であることが示された。最後に (iv) が満たされていることを確認する。全単射線型写像 R について $0 \in A \Leftrightarrow 0 \in R^{-1}A$ ($\forall A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$) であることに注意すれば

$$P_{RB_0}(A) = P(B_0^{-1}(R^{-1}A)) = \begin{cases} 1 & 0 \in R^{-1}(A) \\ 0 & 0 \notin R^{-1}(A) \end{cases} = \begin{cases} 1 & 0 \in A \\ 0 & 0 \notin A \end{cases}$$

となり、 P_{RB_0} と δ_0 は $\mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ の上で一致する。

- (2) 講義資料定義 3.1 の番号 (i)(ii)(iii) の順番に照合していく。その前に、 $((1/\sqrt{c})B_{ct})$ が確率空間 (Ω, \mathcal{F}, P) 上の確率過程となっていることは、 $(1/\sqrt{c})I_N$ (I_N は N 次元単位行列) が $\mathbb{R}^N \rightarrow \mathbb{R}^N$ の連続写像であることと (1) の証明から確認できる。(i) について、 $[0, \infty) \ni t \mapsto B_{ct}(\omega) \in \mathbb{R}^N$, ($\forall \omega \in \Omega$) が連続であるから $[0, \infty) \ni t \mapsto (1/\sqrt{c})B_{ct}(\omega) \in \mathbb{R}^N$, ($\forall \omega \in \Omega$) の連続性も明らかである。(ii) について、写像 $\mathbb{R}^N \ni x \mapsto x/\sqrt{c} \in \mathbb{R}^N$ は $\mathbb{R}^N \rightarrow \mathbb{R}^N$ の連続な全単射であり、明らかに逆写像 $\mathbb{R}^N \ni x \mapsto \sqrt{c}x \in \mathbb{R}^N$ もまた連続な全単射である。従って任意の $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ に対して

$$\frac{1}{\sqrt{c}}A := \left\{ \frac{1}{\sqrt{c}}x \mid x \in A \right\} \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N), \quad \sqrt{c}A := \{ \sqrt{c}x \mid x \in A \} \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$$

が成り立つ。よって任意の $t \geq 0$ に対して

$$\left\{ \left(\frac{1}{\sqrt{c}}B_{ct} \right)^{-1}(A) \mid A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N) \right\} = \{ B_{ct}^{-1}(A) \mid A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N) \}$$

が成り立つから、任意の $s \geq 0$ に対して

$$\sigma\left(\frac{1}{\sqrt{c}}B_{cu} : u \leq s\right) := \bigvee_{u \leq s} \left\{ \left(\frac{1}{\sqrt{c}}B_{cu} \right)^{-1}(A) \mid A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N) \right\} = \bigvee_{u \leq s} \{ B_{cu}^{-1}(A) \mid A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N) \} = \sigma(B_{cu} : u \leq s)$$

となり、任意の $0 \leq s < t$ に対して $B_{ct} - B_{cs}$ は $\sigma(B_{cu} : u \leq s)$ と独立であるから、任意の $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ と $F \in \sigma\left(\frac{1}{\sqrt{c}}B_{cu} : u \leq s\right) = \sigma(B_{cu} : u \leq s)$ に対して

$$\begin{aligned} \mathbb{P}\left(\left\{\frac{1}{\sqrt{c}}B_{ct} - \frac{1}{\sqrt{c}}B_{cs} \in A\right\} \cap F\right) &= \mathbb{P}\left(\left\{B_{ct} - B_{cs} \in \sqrt{c}A\right\} \cap F\right) \\ &= \mathbb{P}\left(B_{ct} - B_{cs} \in \sqrt{c}A\right) \mathbb{P}(F) \\ &= \mathbb{P}\left(\frac{1}{\sqrt{c}}B_{ct} - \frac{1}{\sqrt{c}}B_{cs} \in A\right) \mathbb{P}(F) \end{aligned}$$

が成り立つ。これは任意の $0 \leq s < t$ に対して $\frac{1}{\sqrt{c}}B_{ct} - \frac{1}{\sqrt{c}}B_{cs}$ が $\sigma\left(\frac{1}{\sqrt{c}}B_{cu} : u \leq s\right)$ と独立であることを示す。(iii) について、これもヤコビアンが $(\sqrt{c})^N$ になることに注意すれば

$$\begin{aligned} \mathbb{P}\left(\frac{1}{\sqrt{c}}B_{ct} - \frac{1}{\sqrt{c}}B_{cs} \in A\right) &= \mathbb{P}\left(B_{ct} - B_{cs} \in \sqrt{c}A\right) \\ &= (2\pi(ct - cs))^{-\frac{N}{2}} \int_{\sqrt{c}A} \exp\left(-\frac{|x|^2}{2(ct - cs)}\right) dx \\ &= (2\pi(t - s))^{-\frac{N}{2}} \int_A \exp\left(-\frac{|y|^2}{2(t - s)}\right) dy \quad \left(y = \frac{1}{\sqrt{c}}x \text{ と変数変換}\right) \end{aligned}$$

が成り立つことにより、任意の $0 \leq s < t$ に対して $\frac{1}{\sqrt{c}}B_{ct} - \frac{1}{\sqrt{c}}B_{cs}$ は平均ベクトル 0 、共分散行列 $(t - s)I_N$ の N 次元 Gauss 型確率変数であると判る。最後に (iv) を示す。任意の $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ に対して $0 \in A \Leftrightarrow 0 \in \sqrt{c}A$ であることに注意すれば、

$$\mathbb{P}_{\frac{1}{\sqrt{c}}B_0}(A) = \mathbb{P}\left(B_0^{-1}(\sqrt{c}A)\right) = \begin{cases} 1 & 0 \in \sqrt{c}A \\ 0 & 0 \notin \sqrt{c}A \end{cases} = \begin{cases} 1 & 0 \in A \\ 0 & 0 \notin A \end{cases}$$

が成り立つから $\mathbb{P}_{\frac{1}{\sqrt{c}}B_0}$ と δ_0 は $\mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ の上で一致する。

- (3) 形から $(B_{t+h} - B_h)$ が確率過程であることは明らかである。講義資料定義 3.1 の (i) から見ていく。 $B = (B_t)$ が Brown 運動であるから

$$[0, \infty) \ni t \mapsto B_{t+h}(\omega) - B_h(\omega) \in \mathbb{R}^N, \quad (\forall \omega \in \Omega)$$

が連続写像であることは明らかである。次に (ii) を確認する。任意の $t \geq 0$ に対して B_{t+h} は可測 $\mathcal{F}_{t+h}^B / \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ 、 B_h は可測 $\mathcal{F}_h^B / \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ であって、 $\mathcal{F}_h^B \subset \mathcal{F}_{t+h}^B$ により $B_{t+h} - B_h$ は可測 $\mathcal{F}_{t+h}^B / \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ である。つまり

$$\{(B_{t+h} - B_h)^{-1}(A) \mid A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)\} \subset \mathcal{F}_{t+h}^B$$

が成り立っているから

$$\sigma(B_{u+h} - B_h : u \leq s) := \bigvee_{u \leq s} \{(B_{u+h} - B_h)^{-1}(A) \mid A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)\} \subset \mathcal{F}_{s+h}^B$$

の関係がわかる。従って任意の $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ と $F \in \sigma(B_{u+h} - B_h : u \leq s) \subset \mathcal{F}_{s+h}^B$ に対して、

$$\begin{aligned} &\mathbb{P}(\{(B_{t+h} - B_h) - (B_{s+h} - B_h) \in A\} \cap F) \\ &= \mathbb{P}(\{B_{t+h} - B_{s+h} \in A\} \cap F) \\ &= \mathbb{P}(B_{t+h} - B_{s+h} \in A) \mathbb{P}(F) \quad (B_{t+h} - B_{s+h} \text{ と } \mathcal{F}_{s+h}^B \text{ が独立}) \\ &= \mathbb{P}((B_{t+h} - B_h) - (B_{s+h} - B_h) \in A) \mathbb{P}(F) \end{aligned}$$

となるから、任意の $0 \leq s < t$ に対して $(B_{t+h} - B_h) - (B_{s+h} - B_h)$ は $\sigma(B_{u+h} - B_h : u \leq s)$ と独立であることが示された. (iii) について、任意の $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ に対して

$$\begin{aligned} \mathbf{P}((B_{t+h} - B_h) - (B_{s+h} - B_h) \in A) &= \mathbf{P}(B_{t+h} - B_{s+h} \in A) \\ &= (2\pi((t+h) - (s+h)))^{-\frac{N}{2}} \int_A \exp\left(-\frac{|x|^2}{2((t+h) - (s+h))}\right) dx \\ &= (2\pi(t-s))^{-\frac{N}{2}} \int_A \exp\left(-\frac{|x|^2}{2(t-s)}\right) dx \end{aligned}$$

が成り立つから、任意の $0 \leq s < t$ に対して $(B_{t+h} - B_h) - (B_{s+h} - B_h)$ は平均ベクトル $\mathbf{0}$ 、共分散行列 $(t-s)I_N$ の N 次元 Gauss 型確率変数であると示された. 最後に (iv) を確認する. 便宜上 $Y_t := B_{t+h} - B_h$ ($\forall t \geq 0$) と表記する. $t = 0$ の場合 Ω 上で $Y_0 = \mathbf{0}$ が成り立っているから、任意の $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ に対して

$$\mathbf{P}_{Y_0}(A) = \mathbf{P}(Y_0^{-1}(A)) = \begin{cases} 1 & \mathbf{0} \in A \\ 0 & \mathbf{0} \notin A \end{cases}$$

となり、 Y_0 の分布は $\mathcal{B}(\mathbb{R}^N)$ 上で δ_0 に一致する. ■

2 レポート課題その2

講義資料定義 3.12 に定義される Brown 運動が存在する確率空間 (Ω, \mathcal{F}, P) を基礎に考える.

N を正整数, $x = (x_1, \dots, x_N) \in \mathbb{R}^N$ に対して, $|x| = \sqrt{x_1^2 + \dots + x_N^2}$ で Euclid のノルムを定義する. $B^x = (B^x(t))_{t \geq 0}$ を x から出発する N -次元 (\mathcal{F}_t) -Brown 運動とし, σ を (\mathcal{F}_t) -停止時間とする, このとき, 次の (1), (2), (3) に回答せよ.

- (1) $|B^x|^2 = (|B^x(t)|^2)_{t \geq 0}$ はクラス (DL) に属する SbMG であることを示し, その Doob-Meyer 分解を求めよ.
- (2) 任意の $t \geq 0$ に対して $E[|B^x(\sigma \wedge t)|^2] = NE[\sigma \wedge t] + |x|^2$ が成り立つことを示せ.
- (3) D を \mathbb{R}^N の有界領域とし, $x \in D$ とする. σ_D を領域 D からの脱出時間 $\sigma_D = \inf\{t > 0 : B^x(t) \in \mathbb{R}^N \setminus D\}$ とするとき, $P(\sigma_D < \infty) = 1$ が成り立つことを示せ.

証明.

- (1) 講義資料命題 3.9(3) は講義資料定義 3.12 で定義される x 出発の (\mathcal{F}_t) -Brown 運動についても成り立つ. よって $B_i^{x_i}$ ($i = 1, 2, \dots, N$) が (\mathcal{F}_t) -マルチンゲールであるから, 凸関数 $|\cdot|^2$ で変換することにより $|B_i^{x_i}|^2$ ($i = 1, 2, \dots, N$) は (\mathcal{F}_t) -劣マルチンゲールとなる. 従ってその有限和で表される $|B^x|^2 = (|B^x(t)|^2)_{t \geq 0}$ も (\mathcal{F}_t) -劣マルチンゲールである. 実際, $B_i^{x_i}$ ($i = 1, 2, \dots, N$) が (\mathcal{F}_t) -適合過程で任意の $t \geq 0$ で二乗可積分であることから, $|B^x|^2$ についても (\mathcal{F}_t) -適合で任意の $t \geq 0$ で可積分であることが従い, また任意の $0 \leq s < t$ に対して $A \in \mathcal{F}_s$ を任意に取れば

$$\int_A |B^x(t, \omega)|^2 P(d\omega) = \sum_{i=1}^N \int_A |B_i^{x_i}(t, \omega)|^2 P(d\omega) \geq \sum_{i=1}^N \int_A |B_i^{x_i}(s, \omega)|^2 P(d\omega) = \int_A |B^x(s, \omega)|^2 P(d\omega)$$

が成り立つから $|B^x|^2$ が (\mathcal{F}_t) -劣マルチンゲールであると判る. 次に $|B^x|^2$ がクラス (DL) に属することを示す. 任意に $a > 0$ を固定する. 講義資料に倣い \mathbf{S}_a が $\sigma(\omega) \leq a$ ($\forall \omega \in \Omega$) を満たす $(\Omega, \mathcal{F}, P, (\mathcal{F}_t)_{t \geq 0})$ 上の停止時刻 σ 全体を表すとする. 任意抽出定理 (講義資料定理 2.21) を適用すれば, 任意の $\sigma \in \mathbf{S}_a$ と $c > 0$ に対して

$$\int_{|B^x(\sigma)|^2 \geq c} |B^x(\sigma(\omega), \omega)|^2 P(d\omega) \leq \int_{|B^x(\sigma)|^2 \geq c} |B^x(a, \omega)|^2 P(d\omega)$$

が成り立つ. Chebyshev の不等式により

$$P(|B^x(\sigma)|^2 \geq c) \leq \frac{1}{c} \int_{\Omega} |B^x(a, \omega)|^2 P(d\omega) \quad (2)$$

も成り立つ. 右辺の可積分関数 $|B^x(a)|^2$ について, 任意の $\epsilon > 0$ に対して或る $\delta > 0$ が存在し, $P(A) < \delta$ なる任意の $A \in \mathcal{F}$ 上での積分は $< \epsilon$ となる. 従って (2) の右辺を $< \delta$ となるような $c > 0$ を選べば, 全ての $c' > c$ に対して

$$\sup_{\sigma \in \mathbf{S}_a} \int_{|B^x(\sigma)|^2 \geq c'} |B^x(\sigma(\omega), \omega)|^2 P(d\omega) < \epsilon$$

が成り立つ．これは確率変数の族 $(|B^x(\sigma)|^2)_{\sigma \in \mathbf{S}_n}$ が一様可積分であることを表している． a は任意であったから $|B^x|^2$ がクラス (DL) に属することが示された．最後に $|B^x|^2$ の Doob-Meyer 分解を求める．命題 3.9(3) により $((\mathcal{F}_t)$ -Brown 運動でも成り立つ) $(|B_i^{x_i}(t)|^2 - t)_{t \geq 0}$ が (\mathcal{F}_t) -マルチンゲールであるとわかっているから， $(|B^x(t)|^2 - Nt)_{t \geq 0}$ もまた (\mathcal{F}_t) -マルチンゲールである．実際， (\mathcal{F}_t) -適合であることと可積分性は上に書いた理由で問題なく，任意の $0 \leq s < t$ と $A \in \mathcal{F}_s$ に対して

$$\begin{aligned} \int_A |B^x(t, \omega)|^2 - Nt \, \mathbf{P}(d\omega) &= \int_A \sum_{i=1}^N |B_i^{x_i}(t, \omega)|^2 - Nt \, \mathbf{P}(d\omega) \\ &= \sum_{i=1}^N \int_A |B_i^{x_i}(t, \omega)|^2 - t \, \mathbf{P}(d\omega) \\ &= \sum_{i=1}^N \int_A |B_i^{x_i}(s, \omega)|^2 - s \, \mathbf{P}(d\omega) \\ &= \int_A |B^x(s, \omega)|^2 - Ns \, \mathbf{P}(d\omega) \end{aligned}$$

も成り立つ．これが求める Doob-Meyer 分解になっていることを確認する．講義資料の定理 2.25 に則れば，まず $(|B^x(t)|^2)_{t \geq 0}$ がクラス (DL) に属している (\mathcal{F}_t) -劣マルチンゲールであり $(|B^x(t)|^2 - Nt)_{t \geq 0}$ は (\mathcal{F}_t) -マルチンゲールであるから，あとは $(Nt)_{t \geq 0}$ が予測可能な可積分増加過程であることをいえば良い． Nt は明らかに左連続，更に各 t ごとに $\omega \in \Omega$ の関数としては定数関数であるから (\mathcal{F}_t) -適合過程であり，よって予測可能である．また $\omega \in \Omega$ に無関係に $N0 = 0$ ， Nt は t の右連続な単調増加関数であって，全ての $t \geq 0$ で $\mathbf{E}[Nt] = Nt < +\infty$ が成り立っていることにより，これは可積分増加過程でもある．

- (2) 一般に連続マルチンゲールを停止時間で停めた過程もまたマルチンゲールとなることをいえばよい．フィルター付き確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, \mathbf{P}, (\mathcal{F}_t))$ 上の \mathbb{R}^1 値連続確率過程 $(X_t)_{t \geq 0}$ が (\mathcal{F}_t) マルチンゲールであるとする．この確率空間上の停止時間 σ を任意に取り $(X_{\sigma \wedge t})_{t \geq 0}$ を考える． $(x_t)_{t \geq 0}$ が連続で (\mathcal{F}_t) -適合であることから (\mathcal{F}_t) -発展的可測となり，講義資料命題 2.20 により全ての t で $X_{\sigma \wedge t} (= X_{\sigma \wedge t} I_{(\sigma \wedge t < +\infty)})$ は可測 $\mathcal{F}_{\sigma \wedge t} / \mathcal{B}(\mathbb{R}^1)$ となる． $\mathcal{F}_{\sigma \wedge t} \subset \mathcal{F}_t$ により $(X_{\sigma \wedge t})_{t \geq 0}$ もまた (\mathcal{F}_t) -適合かつ連続であると判る．全ての t で $X_{\sigma \wedge t}$ が可積分となることは， $(|X_t|)_{t \geq 0}$ が (\mathcal{F}_t) -劣マルチンゲールであることと任意抽出定理 (講義資料定理 2.21) により

$$\mathbf{E}[|X_t| | \mathcal{F}_{\sigma \wedge t}] \geq |X_{\sigma \wedge t}|, \quad a.s.$$

となることより従う．マルチンゲール性の三つ目の性質が満たされるかを確認する．任意の時間 $0 \leq s < t$ に対して $A \in \mathcal{F}_s$ を任意に取る．このとき

$$A \cap \{\sigma \wedge t > s\} \cap \{\sigma \leq u\} = \begin{cases} A \cap \{s < \sigma \leq u\} \in \mathcal{F}_u & (u \geq s) \\ \emptyset \in \mathcal{F}_u & (u < s) \end{cases}, \quad \forall u \in [0, \infty)$$

が成り立つことから $A \cap \{\sigma \wedge t > s\} \in \mathcal{F}_\sigma$ である． $\sigma \wedge t$ が停止時間であるから $A \cap \{\sigma \wedge t > s\} \in \mathcal{F}_s$ でもあり，従って

$$A \cap \{\sigma \wedge t > s\} \in \mathcal{F}_s \cap \mathcal{F}_\sigma = \mathcal{F}_{\sigma \wedge s}$$

が成り立つ．任意抽出定理 (講義資料定理 2.21) を適用すれば

$$\int_{A \cap \{\sigma \wedge t > s\}} X(\sigma(\omega) \wedge t, \omega) \, \mathbf{P}(d\omega) = \int_{A \cap \{\sigma \wedge t > s\}} X(\sigma(\omega) \wedge s, \omega) \, \mathbf{P}(d\omega)$$

と表すことができる．一方で $A \cap \{\sigma \wedge t \leq s\}$ 上の積分も考えると, $s < t$ としているからこの集合の上で $\sigma \wedge t = \sigma \wedge s = \sigma$ が成り立っていることに注意して

$$\int_{A \cap \{\sigma \wedge t \leq s\}} X(\sigma(\omega) \wedge t, \omega) P(d\omega) = \int_{A \cap \{\sigma \wedge t \leq s\}} X(\sigma(\omega) \wedge s, \omega) P(d\omega)$$

が成り立つ．二つの積分を併せれば

$$\int_A X(\sigma(\omega) \wedge t, \omega) P(d\omega) = \int_A X(\sigma(\omega) \wedge s, \omega) P(d\omega)$$

が成り立つ．時間 $0 \leq s < t$ と $A \in \mathcal{F}_s$ は任意であったから, σ で停めた過程 $(X_{\sigma \wedge t})_{t \geq 0}$ もまた (\mathcal{F}_t) -マルチンゲールであると示された．以上の結果を用いれば, (1) における (\mathcal{F}_t) -マルチンゲール $(|B^x(t)|^2 - Nt)_{t \geq 0}$ に対して

$$\begin{aligned} & \int_{\Omega} |B^x(\sigma(\omega) \wedge t, \omega)|^2 - N(\sigma(\omega) \wedge t) P(d\omega) \\ &= \int_{\Omega} |B^x(0, \omega)|^2 P(d\omega) = \sum_{i=1}^N \int_{\Omega} B_i^x(0, \omega)^2 P(d\omega) = \sum_{i=1}^N x_i^2 = |x|^2 \end{aligned}$$

が成り立つ．右辺の変形は命題 3.9 の (1) による (点 x 出発なので x_i^2 となる)．左辺の被積分関数はどちらも可積分関数であるから, 以上で任意の $t \geq 0$ に対して

$$E[|B^x(\sigma \wedge t)|^2] = N E[\sigma \wedge t] + |x|^2$$

が成り立つことが示された．

- (3) 講義資料定義 2.8 と定理 2.9 により σ_D は広義停止時間であるが, 同資料仮定 2.11 によりフィルトレーションは右連続であるから, 命題 2.7 により σ_D は (\mathcal{F}_t) -停止時間として扱うことができる．(2) の結果により任意の $t \geq 0$ に対して

$$E[|B^x(\sigma_D \wedge t)|^2] = N E[\sigma_D \wedge t] + |x|^2 \quad (3)$$

が成り立つ．ここで左辺が t に関して一様に有界であることを証明する．各 $\omega \in \Omega$ ごとに, 写像 $[0, +\infty) \ni t \mapsto B^x(t, \omega)$ が連続であることと D が開集合であることにより $0 \leq s \leq \sigma_D(\omega)$ であるような s に対して $B^x(s, \omega) \in \overline{D}$ となる．ここで \overline{D} は D の閉包を表すとする． D が \mathbb{R}^N の有界領域であるから \overline{D} も \mathbb{R}^N の有界閉集合となる．ここで

$$d := \sup\{|x - y| : x, y \in \overline{D}\}$$

とおく．等式 (3) の左辺の被積分関数について, 時刻の部分 $\sigma_D(\omega) \wedge t \leq \sigma_D(\omega)$ が全ての $\omega \in \Omega$ で成立しているから, ω ごとに $B^x(\sigma_D(\omega) \wedge t, \omega)$ は \overline{D} に属している．従って $|B^x(\sigma_D(\omega) \wedge t, \omega) - x| \leq d$ ($\forall \omega \in \Omega$) で抑えられるから

$$\begin{aligned} E[|B^x(\sigma_D \wedge t)|^2] &= \int_{\Omega} |B^x(\sigma_D(\omega) \wedge t, \omega)|^2 P(d\omega) \\ &= \int_{\Omega} |B^x(\sigma_D(\omega) \wedge t, \omega) - x + x|^2 P(d\omega) \\ &= \int_{\Omega} |B^x(\sigma_D(\omega) \wedge t, \omega) - x|^2 + 2\langle B^x(\sigma_D(\omega) \wedge t, \omega) - x, x \rangle + |x|^2 P(d\omega) \\ &\leq d^2 + 2d|x| + |x|^2 \end{aligned}$$

が成り立つ．ここで $\langle \cdot, \cdot \rangle$ は \mathbb{R}^N の標準的内積を表し (つまり $\langle x, y \rangle = \sum_{i=1}^N x_i y_i$, $x = {}^t(x_1, \dots, x_N)$, $y = {}^t(y_1, \dots, y_N) \in \mathbb{R}^N$), 最後の式変形で Schwarz の不等式を使った．等式 (3) にこの結果を適用すれば

$$\mathbf{E}[\sigma_D \wedge t] \leq \frac{d^2 + 2d|x|}{N}$$

が $t \geq 0$ に依らずに成り立つ．これにより $\mathbf{P}(\sigma_D = +\infty) = 0$ が示される．もし $\alpha := \mathbf{P}(\sigma_D = +\infty) > 0$ であるとすれば, 集合 $\{\sigma_D = +\infty\}$ の上で, $t > (d^2 + 2d|x|)/(\alpha N)$ となる t に対して

$$\frac{d^2 + 2d|x|}{\alpha N} \mathbf{P}(\sigma_D = +\infty) < \int_{\{\sigma_D = +\infty\}} \sigma_D(\omega) \wedge t \mathbf{P}(d\omega) \leq \int_{\Omega} \sigma_D(\omega) \wedge t \mathbf{P}(d\omega) \leq \frac{d^2 + 2d|x|}{N}$$

が成り立ち矛盾ができるからである．ゆえに $\mathbf{P}(\sigma_D < +\infty) = 1$ が示された. ■

3 レポート課題その 3

$B = (B(t))_{t \geq 0}$, $W = (W(t))_{t \geq 0}$ は, とともに 0 から出発する独立な 1-次元 Brown 運動, a, b は $ab \neq 0$ なる実数, n は 2 以上の整数とする. このとき, 以下の (1), (2), (3) の確率過程に Itô の公式が適用できることを確認し, 適用したその結果を書け.

- (1) $X = (X(t))_{t \geq 0}$ は $t \geq 0$ に対して $X(t) = (B(t) + at)^n$ で定義される確率過程.
- (2) $Y = (Y(t))_{t \geq 0}$ は $t \geq 0$ に対して $Y(t) = B(t)W(t)$ で定義される確率過程.
- (3) $Z = (Z(t))_{t \geq 0}$ は $t \geq 0$ に対して $Z(t) = e^{-bt} \left(a + \int_0^t e^{bs} dB(s) \right)$ で定義される確率過程.

解答 設問文ではただの Brown 運動と書いてありますが, 講義資料 5 の仮定に合わせて, 考えている確率空間は”原点から出発する 1 次元 (\mathcal{F}_t) -Brown 運動 $B = (B_t)$ を備えた usual なフィルター付き確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, \mathbf{P}, (\mathcal{F}_t))$ ”とし, 設問の B, W は 1-次元 (\mathcal{F}_t) -Brown 運動であると考えて以下に進みます.

- (1) 講義資料定理 6.2 を適用する.

$$B(t) = \int_0^t dB(s)$$

であるから, 講義資料中の式 (6.1) における $\Phi = (\Phi(t))_{t \geq 0}$, $\Psi = (\Psi(t))_{t \geq 0}$ はそれぞれ $\Phi(t) = 1$, $\Psi(t) = 0$ ($\forall t \geq 0$) である. よって明らかに $\Phi \in \mathcal{L}_{2,loc}$, $\Psi \in \mathcal{L}_{1,loc}$ であるから, $(B(t))_{t \geq 0}$ は 1 次元 Itô 過程である. また定理 6.2 の $f : [0, T] \times \mathbb{R} \ni (t, x) \mapsto f(t, x) \in \mathbb{R}$ はこの場合 $f(t, x) = (x + at)^n$ で表現される関数であり, $t \in [0, T]$ を固定して x の多項式関数であるから x の関数として C^2 級であり, $x \in \mathbb{R}$ を固定したとき t の関数としても多項式関数であるから $[0, T]$ で C^1 級である. 以上より講義資料定理 6.2 を適用することができて, 講義資料式 (6.5) により

$$(B(t) + at)^n = \int_0^t n(B(s) + at)^{n-1} ds + \int_0^t n(B(s) + at)^{n-1} dB(s) + \frac{1}{2} \int_0^t n(n-1)(B(s) + at)^{n-2} ds$$

が成り立つ.

- (2) 講義資料定理 6.3 を適用する. B, W が独立な原点出発の 1 次元 Brown 運動であるから $(B(t), W(t))_{t \geq 0}$ も原点出発の 2 次元 Brown 運動である.

$$B(t) = \int_0^t dB(s), \quad W(t) = \int_0^t dW(s)$$

であるから, 講義資料中の式 (6.8) における $\Phi = ((\Phi^{ik}(t))_{1 \leq i, k \leq 2})_{t \geq 0}$, $\Psi = (\Psi^1(t), \Psi^2(t))_{t \geq 0}$ はそれぞれ $\Phi^{ik}(t) = \delta_{ik}$, $\Psi^i(t) = 0$ ($\forall t \geq 0, i, k = 1, 2$) である. ただし δ_{ik} は Kronecker のデルタである. 従って $(B(t), W(t))_{t \geq 0}$ は 2 次元 Itô 過程である. また定理 6.3 の $f : [0, T] \times \mathbb{R}^2 \ni (t, x) \mapsto f(t, x) \in \mathbb{R}$ はこの場合 $f(t, x) = x_1 x_2$ ($x = {}^t(x_1, x_2) \in \mathbb{R}^2$) で表現される関数であり, x の関数として C^2 級である. $x \in \mathbb{R}$ を固定したときは t についての定数関数であると思えば $[0, T]$ で C^1 級である. 以上より講義資料定理 6.3 を適用することができて,

$$B(t)W(t) = \int_0^t W(s) dB(s) + \int_0^t B(s) dW(s)$$

と表せる.

(3) $Z(0) = a$ である. $U(t) := e^{bt}Z(t)$ ($\forall t \geq 0$) と置けば

$$U(t) - U(0) = e^{bt}Z(t) - a = \int_0^t e^{bs} dB(s)$$

と表現できる. 右辺は Itô 過程であるから講義資料定理 6.2 を適用できる. 関数 $f : [0, +\infty) \times \mathbb{R}^1 \ni (t, x) \mapsto f(t, x) \in \mathbb{R}^1$ として $f(t, x) = e^{-bt}x$ とおき式 (6.5) を書けば

$$\begin{aligned} f(t, U(t)) - f(0, U(0)) &= Z(t) - Z(0) \\ &= \int_0^t -bZ(s) ds + \int_0^t e^{-bs} dB(s) \end{aligned} \quad (4)$$

と表すことができる. ここで上式の右辺が Itô 過程となっていることを示す. 確率積分項の被積分関数 $[0, +\infty) \ni t \mapsto e^{-bt} \in \mathbb{R}^1$ について, 各 $t \geq 0$ において ω の関数として定数関数と見れば確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, \mathbf{P})$ 上の予測可能な確率過程となり, 任意の $[0, T]$ ($T > 0$) 上で t について二乗可積分であるから $\mathcal{L}_{2,loc}$ に属する. 式 (4) のもう一方の項では確率過程 $(Z(t))_{t \geq 0}$ が被積分関数となっている. 設問文中の $Z(t)$ の定義式における $\int_0^t e^{bs} dB(s)$ は, $(e^{bt})_{t \geq 0}$ が $[0, +\infty) \times \Omega \rightarrow \mathbb{R}^1$ の関数として \mathcal{L}_2 の元であることと講義資料定理 5.8(1) により $\mathcal{M}_{2,c}$ に属しているとわかる. 従って $Z(t)$ は適合過程となり, もちろん左連続でもあるから予測可能である. また $Z(t)$ は連続だから任意の区間 $[0, T]$ で可積分であり, $(Z(t))_{t \geq 0} \in \mathcal{L}_{1,loc}$ であるとわかる. ゆえに式 (4) の右辺は Itô 過程を表している. 以上より $Z(t)$ は確率微分方程式

$$dZ(t) = e^{-bt} dB(t) - bZ(t) dt$$

をみたす. ■